PETAL

知識の花弁

No.18

［2025 復刊号］

先生のおすすめ本

図書館業務の舞台ウラ「資料修理編」

所長室訪問　ーPETAL復刊にあたってー

新サービスの紹介「使ってみよう! 早慶ライブラリーパスポート」

資料紹介「高名美人六家撰 難波屋おきた 再出」

慶應義塾大学　三田メディアセンター

『追放された予言者トロツキー：1929-1940』

ドイッチャー·アイザック 著、田中西二郎、橋本福夫、山西英一 訳／新評論（品切れ）

私は中国政治史を研究してきたが、ソビエト史の研究者にいささかコンプレックスを抱いてきた。研究の水準において、彼らに及ばないからである——日本においてだけでなく、欧米においても事情は同様である。理由の一部ははっきりしている。ソビエト史研究にはE・H・カーとI・ドイッチャーという巨人がいて、後に続く人々のよき目標となったのに対して、中国政治史には彼らに比肩しうる存在が見当たらないからである。

もうひとつの理由は、ロシア革命史に登場する人々——レーニン、トロツキー、ブハーリンなど——の知的水準がすばらしく高いために、彼らを論じる際には、やはり知的な洗練さが要求されるということである。一方、毛沢東や鄧小平を論じると、どうしても彼らの通俗的な言葉に引きずられて、歴史記述もまた同様の調子を帯びてしまうのである。

本書は、ドイッチャーのトロツキー伝三部作の最後の巻に当たる。伝記で、これを超えるものはないと私には思える。格調高い文体は、トロツキーの真の悲劇を伝えている。とくに、ヒトラーの支配を阻止するために、トルコに亡命していたトロツキーが世界の命運をかけてコミンテルンやドイツ共産党と論争する場面は無限の余韻を与えてくれる。このような文章が書けたらと、自分が論文を書くときには、いつも本書を数ページ読んでから、執筆にとりかかることにしている。

高橋 伸夫 先生
［法学部 名誉教授］

先生のおすすめ本

三田キャンパスにて授業が開講されている文学部、経済学部、法学部、商学部の先生方に、
おすすめの本を紹介していただきました。

※QRコードから慶應義塾大学メディアセンターの所蔵情報が確認できます。

『吉里吉里人』（上巻・中巻・下巻）

井上ひさし 著／新潮文庫

井上ひさしの『吉里吉里人』を最初に知ったのは、NHKラジオ「中学生の勉強室」で国語の題材として取り上げられていたことによる。国語の題材としては異色だったが、印象的で読みたいと思った。その後、大学３年の夏、800頁を超える分厚い単行本として刊行されるや否や、すぐに買い、一心不乱に数日かけて読んだことを覚えている。

東北の一つの村が日本の農政に反発し、独自の公用語（地元方言の吉里吉里語）、通貨（イエン）、憲法（日本国憲法を参考）を持つ国として独立し、日本国政府の妨害によって崩壊するまでの騒動を実際に体験するように描いた『吉里吉里人』は、井上ひさしらしいユーモア、風刺、言葉遊び、猥褻さが満載の大小説である。同時に、『吉里吉里人』では現在の日本にも通じる地方の問題、農業政策の問題、文化の問題、医療の問題、平和の問題などが次々と突きつけられる。当たり前だと思われていることを当たり前と捉えない著者の姿勢が、吉里吉里人の吉里吉里語を通して語られる。東京圏への一極集中化が当たり前になっている今、ぜひ若い人に読んでほしい。

植田 浩史 先生
［経済学部教授］

『治療文化論：精神医学的再構築の試み』

中井久夫 著／岩波書店

充実した日々を過ごしていたにもかかわらず、どこか違和感を感じていた大学時代。強制収容所という極限状態に置かれた人間の可能性を考察する『夜と霧』（ヴィクトール・フランクル）に感動し、その訳者の下で臨床心理士を目指すも、先生の定年退職で途方に暮れた。授業で、夢や幼児期の体験を分析し、精神分析の専門言語で語り直す中で、記憶があらたに紡ぎ直されるような奇妙な感覚を味わった。心理学や精神医学の言葉を通じて創られる「自己」とは一体何なのか――その問を探究したくて手に取ったのが、中井久夫のこの一冊だ。天才精神科医と名高い中井は「無意識」が発見されたヨーロッパの独特の地形と土地の記憶に迫り、日本の新宗教創始者たちが神の降臨までに辿った苛酷な人生を描き出し、妖精を見る少女との出会いを静逸に語る。時空を超え、さまざまな文化を旅してみせる中井の洞察力は、精神医学が客観的科学を超えた、哲学的省察の場であることを強烈に印象付けた。普遍性を目指しながらも、精神分析が19世紀末のウィーンの家族観の影響下にあったように、そもそも「こころの病」の捉え方や、「正常と異常の境界線」は、時代や文化によって大きく異なる。そういった治療文化の豊饒さと多様性を、「参与する観察者」として探究できる医療人類学に出会うきっかけとなった、私にとっては大切な一冊だ。

北中 淳子 先生
［文学部教授］

『死んだ山田と教室』

金子玲介 著／講談社

著者はボクのゼミのOBである。「金子玲介」はペンネームだが、本名のイニシャルも「K」ゆえ、本稿は「K君」と称する。

S高から慶應に学んだK君は高校時代から小説をものし、某賞の最終候補の類いには選ばれた実績があると聞く。大学進学後は、小説家と併せて、公認会計士を志し、けだし、しかるがゆえに、会計学のボクのゼミに入り、しかし、ゼミのお蔭は皆無だろうが、見事、現役合格を果たし、某大手監査法人に就職、監査業務に従事しつつも、執筆活動は続け、過日、講談社のメフィスト賞を受け、処女出版を果たし、それを機に監査法人を退職、専業の小説家生活に入り、現在に至る。

本書の舞台は某大学附属の某高校（男子校）であって、そのモデルはS高に相違ない。某高校についての記述は母校愛に溢れ、そのことがまたS高をもって想起させる。ボクはJ高に学んだため、S高のことは直接には知らないが、ボクの周りにS高の出身者は少なくなく、その彼等のなかには‘S高大好き人間’が少なくない。そうした彼等の話からは、いかにS高が愛すべき母校か、を窺うことができ、本書における某高校についての記述は（特に‘行間’が）母校愛に溢れる。‘男子校ならではの実に馬鹿々々しいノリ’が実に生き生きと描かれている。

ところで、K君は退職して専業小説家となり、一見、退路を断って、という感じだが、そんなことは決してない。彼には公認会計士という資格がある。ちなみに、ボクは、会計学に加えて、プロフェッション論も手掛け、常々資格というものの有り難さを説いている。いわく、「「人間、肩書きより中身が大事」などといわれるが、肩書き（地位や資格）は重要である。「中身」はなかなか分からない。顔をみただけでは分からない」。それに「資格は腐らない」。公認会計士のK君は、したがって、いつでも再就職ができる。退路を断ったわけではないという‘余裕’こそがよい作品を生むことになるだろう。

内容を紹介する前に紙幅が尽きた。

友岡 賛 先生
［商学部 名誉教授］

図書館業務の舞台ウラ

～資料修理編～

長い歴史の中で収集された約300万冊にも及ぶ蔵書を有する慶應義塾図書館。調査研究に使われる資料には、古くても価値のあるものが多数含まれます。貴重な資料の劣化を防ぎ、可能な限り利用し続けていただけるよう、図書館スタッフは日々様々な資料メンテナンスを行っています。今回は現場で行われている修理方法を一部ご紹介します。

1 背が外れているもの

本の背の部分は書架から取り出す際に力が加わることが多いため、破損しやすいです。

取れている部分に図書修理用の糊を塗って接着します。資料の状態によっては、中性紙で作った輪を中に入れて背を補強することもあります。

さらに、資料のサイズに合わせた透明ブックカバーが作成できる機械を使って、破損した資料を保護します。透明ブックカバーは資料に負担をかけずに補修できる点が優れています。

2 ページが破れているもの

破れたページに図書補修用の薄い和紙素材のテープを貼ります。ちなみに、セロハンテープは時間が経つと劣化して変色し、かえって本を傷めてしまうので使いません。

3 そのまま保存するもの

破損・劣化が進んだ資料や、原装保存が求められる貴重な資料などは、
酸化しにくい中性紙でできた箱や封筒に入れて保存します。

資料のサイズに合わせて箱の
厚みや高さを調整します。

開閉のためのマジックテープを貼り付け、黒テープで保護します。

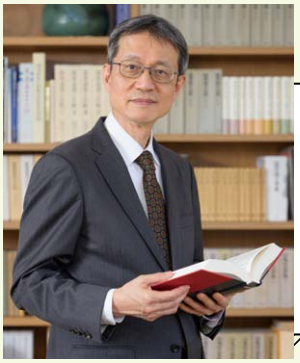
タイトル・請求記号ラベルなどをつけて…。いろいろなサイズの箱や封筒の出来上がり！

修理の方針は時代と共に少しずつ変化していますが、修理担当は一冊ごとに最適な修理方法を見極めて丁寧にメンテナンスを行っています。図書館資料は慶應義塾大学の貴重な資産です。大切に取り扱っていきましょう。

所長室訪問。

ーPETAL復刊にあたってー

三田メディアセンターの広報誌「知識の花弁」は2013年春に創刊、その後「PETAL：知識の花弁」へとタイトルを変え、年２回のペースで刊行を続けてきました。コロナ禍のため2020年春号を最後に休刊していましたが、この度気持ちも新たに復刊の運びとなりました。５年ぶりの刊行にあたり、三田メディアセンター所長／本塾経済学部教授 須田伸一先生に、広報誌への想いや、所長の業務についてお話を伺いました。



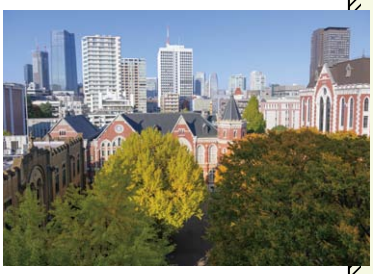
Q1 久々のPETAL刊行にあたり、メッセージをお願いします。

PETALが、皆さんにとって、三田メディアセンターをよりよく知るきっかけとなれば嬉しく思います。勉強に打ち込みたいとき、また勉強に疲れたときにも、三田メディアセンターに足を運んでみてください。

Q2 簡単に所長の仕事内容を教えてください。

メディアセンターの日々の業務は専門的知識をもつ職員に任せているので、私の仕事は塾内外の会議に出てメディアセンターの現状を説明したり、他大学の図書館長と大学図書館をめぐる課題を話し合ったりすることの方に比重があります。もちろん、メディアセンター職員との定期的な意見交換も欠かせません。

少し細かい話をすれば、「所長」は三田メディアセンター所長とメディアセンター所長の兼任で、前者の仕事には三田キャンパスの図書館で購入する貴重書の選定などが含まれ、塾外の人とは後者の立場で会うことが多いですね。いずれにしても、普段の教員生活ではなかなかできない貴重な体験を数多くすることができる仕事です。



所長室からは旧図書館はもちろん、その先の港区のビル群まで見渡せる

Q3 所長としての仕事で思い出深かったものを教えてください。

思い出深い仕事はいろいろとありますが、ひとつあげるとすれば、海外の大学図書館を見学できたことでしょうか。これまで２度海外出張する機会があり、所長就任直後の2019年４月にはアメリカのワシントン大学図書館とオハイオ州立大学図書館を案内してもらいました。また2024年３月の台湾出張では、国立台湾大学図書館と、これは大学図書館ではありませんが、日本の国会図書館に相当する国立台湾図書館を見学しました。

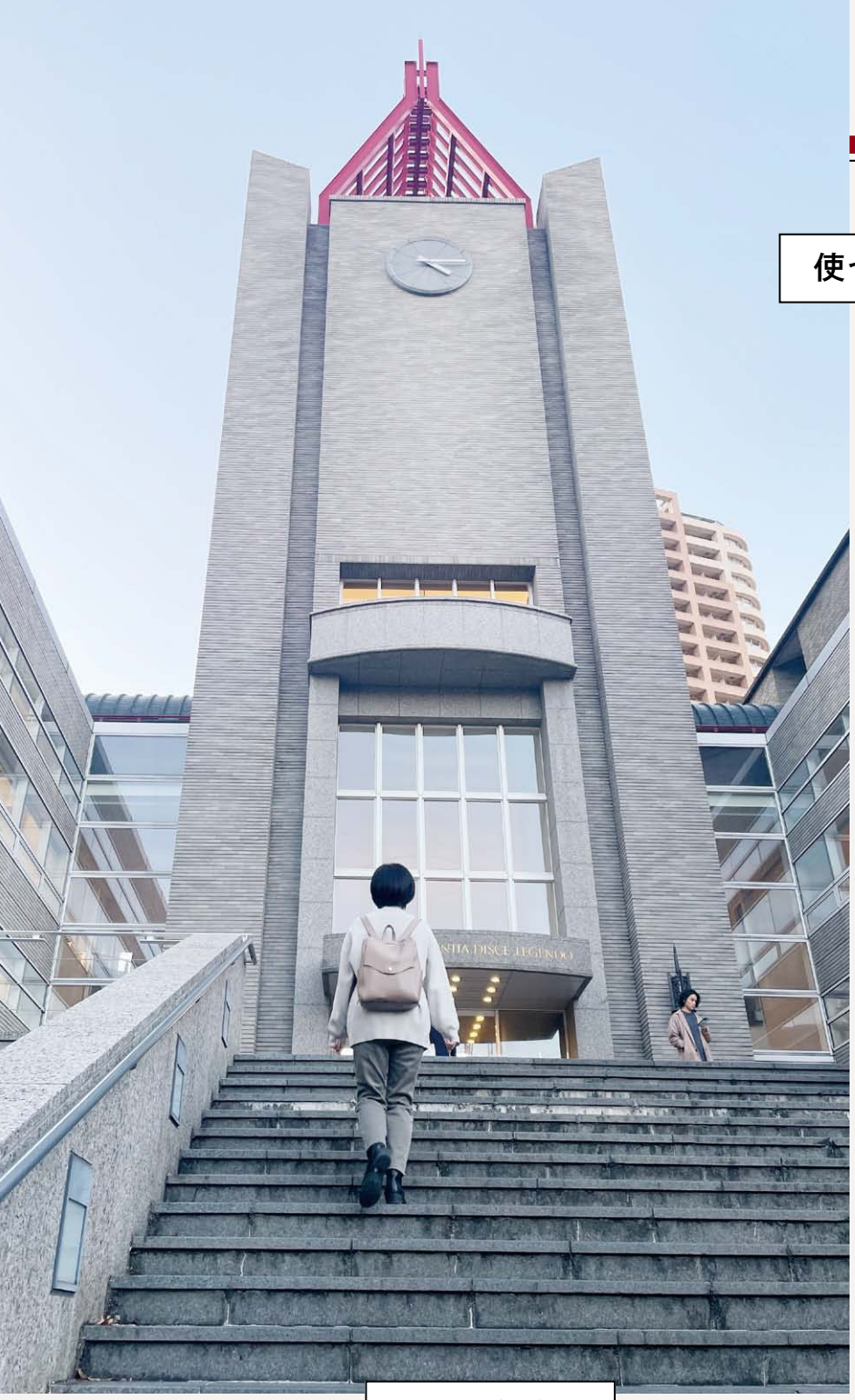
Q4 所長室のここを紹介したい！

歴史に想いをはせることができる月波楼の扁額

所長室の南側壁面に掛かっている「月波楼」の扁額を紹介します。「月波楼」とは三田キャンパスで最初に図書が置かれた建物の名前で、そこから品川の海に映える月を鑑賞したことが名前の由来といわれています。慶應義塾のカレッジソング「丘の上」（1928年作）の歌詞２番冒頭にも「窓を開（ひら）けば海が見えるよ」との文言があります（月波楼の窓ではありませんが）。

なお、その建物自体は取り壊されて久しく、現在の三田キャンパスからは、たとえ南校舎最上階の窓からも海を臨むことはできません。でも、この扁額が所長室の南側、つまり東京湾の方向に掛かっていることで、その背後に品川沖の景色があるような気持ちになれます。

撮影：株式会社カロワークス（岸 剛史）



使ってみよう！

早慶ライブラリーパスポート

みなさん、早稲田大学の図書館に行ってみたことはありますか？

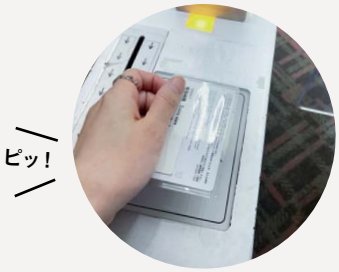
学部生や大学院生は、慶應の学生証でそのまま早稲田大学の図書館に入ることができるのです。

このサービスの名前は「早慶ライブラリーパスポート」！　かっこいいですね。

ちなみに教職員は教職員証で入館できます。

ほかの大学の図書館から本やコピーした論文を取り寄せると、補助はありますが、お金や時間がかかってしまいます。しかし早稲田大学の図書館からは、本の取り寄せがなんと無料！論文のコピー取り寄せもお安くて早いのです。ぜひぜひご利用ください。

ただ、他の大学から取り寄せた本は館内での利用となるのでご注意くださいね。



さらに便利！

早慶ライブラリーブックシェア

大学院生＆教職員は、なんとKOSMOSで、慶應の本と同じように早稲田の本を取り寄せることができます！★慶應の本と同じように★というのがポイント、つまり館外への貸出もできてしまうのです。どんどんご利用ください！

くわしくは

※「早慶ライブラリーパスポート」と「早慶ライブラリーブックシェア」は非常勤講師の方や通信教育課程生はサービスの対象外となります。ご了承ください。

資料紹介

高名美人六家撰
難波屋おきた　再出

寛政７･８年ごろ

内藤　正人
（文学部教授）

二世紀以上にわたる江戸期浮世絵の歴史は、遊女を中心とする美人画と、歌舞伎役者絵とで占められている（風景画や武者絵は、遅れて19世紀の幕末期にようやく盛んになる）。とりわけ、浮世絵誕生以前の風俗画の時代には遊女の舞姿が女歌舞伎絵にもなり得たことから、その流れを受け継いだ美人画とはまさしく浮世絵の核心であり、王道をいく主題でもある。

各時代それぞれに多数の人気絵師たちが入れ替わり活躍したものの、美人画史上の筆頭には喜多川歌麿をあげる必要があるだろう。のちのジャポニスムでもヨーロッパで絶賛された官能性の高いその表現は他を寄せ付けず、在世当時もはたまた現代でも、圧倒的な存在感を誇っている。

歌麿の美人画は当時おもに版画で普及したが、爆発的な人気から当局より規制がかけられるケースもあった。寛政期の寵児となった彼が、長年支えてくれた蔦屋とは別の版元、近江屋から刊行したこの連作版画は、和歌の六歌仙に擬えた美人画集である。本図では浅草寺随身門脇にあった水茶屋・難波屋の評判の看板娘で、寛政三美人と謳われたおきたの愛くるしい表情をとらえる。とくに本図は、歌麿が初めて世に送り出した美人大首絵、すなわち、全身像ではなく半身像で面相をことに大きくクローズアップする描き方を示しており、面相の微妙な描き分けのみならず、身体全体、とくに手や指の描写にまで表情を与えて歌麿美人画の真骨頂を示している。

当時水茶屋の娘は売色するケースもあり、ミスお江戸ともいうべきこうした素人娘の美人画を幕府は警戒したが、歌麿は画面左上のコマ絵のなかに、判じ絵として店舗と人名とを暗示する荒業でそれを回避している。つまりそれぞれの絵は「菜×二把、矢、沖、田」となっているわけだ。しかしながら、寛政八年八月にはこうした判じ絵も禁止されるなど、さしもの人気絵師歌麿も徐々に追い込まれていくのである。

「慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション」にて
大きなサイズの画像がご覧いただけます。

PETAL
知識の花弁

編集・発行　慶應義塾大学　三田メディアセンター
https://www.lib.keio.ac.jp
発行日　2025年４月１日
印刷　有限会社　梅沢印刷所

バックナンバーは
こちらから